

解題

綿内区有文書

【綿内村について】

綿内村は、現在の長野市若穂綿内地区をさす。

この地名はすでに戦国時代には文献上確認できる。十五世紀後半には、この地域は井上政満が知行していた。綿内村は、高井郡に属し、江戸時代にあつては須坂藩領であり高井郡最大の村であつた。石高は江戸時代の初めには二九〇〇石、幕末には三五〇〇石である。

近代以降も綿内村として存続する。明治二十四年の段階では、戸数七五八戸、人口は四〇〇〇人弱である。昭和三十四年には、近隣の川田、保科と合併して若穂町となる。昭和四十一年に長野市と合併して今日に至る。（『角川日本地名大辞典 長野県』 角川書店 一九〇〇年）

【伝来の経緯】

本文書群は、長野市立若穂公民館に保管されていたものを、長野市立博物館が譲渡を受けたものである。本来は、区有文書として区長引継ぎの折には、区長宅に伝えたものであろう。この文書群が公民館に移された経緯についてはよく分からない。なお、本文書群は、長野市公文書館へ移管の予定である。

【文書郡の特徴】

文書群の特徴としては、まずその収納容器にある。受け入れ番号のうちの「古」と記したものは、筆筭に収められたものである。伝来の古文書を筆筭に収納し、近年まで区長引継ぎの文書群として伝えたものであろう。

文書は、年貢関係の資料が少なく、他村との関係など村政にかかわる史料の多いことに気付く。